慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	九州大学附属図書館蔵「犬鷹合戦物語」解題・翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1989
Jtitle	三田國文 No.12 (1989. 12) ,p.31- 39
JaLC DOI	10.14991/002.19891200-0031
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19891200-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

九州大学附属図書館蔵〔犬鷹合戦物語〕解題・翻刻

石川　透

解題

九州大学附属図書館に、目録題を「大鷹合戦物語（仮題）」とする一冊本が存在する。元来は特大横型の奈良絵本だったらしいが、表紙・挿絵、さらには本文の一部分も欠失している。しかし、その残った内容からみると、室町時代から江戸時代初期に流行した御伽草子の一作品で、現在まで伝存の知られていない、新出の物語であるようだ。今回は、本書を紹介するとともに、本来あるべき形、そしてその成立について考察を加えたい。

最初に本書の書誌を記す。

函架番号、支子文庫913オ1。特大横型袋綴、仮綴一冊。寸法、竪二五・六糎、横三三・七糎。表紙、なし。料紙、金泥草模様入り斐紙。外題・内題、なし。目録題、大鷹合戦物語（仮題）。墨付、存十一丁。毎半葉、十三行。字数、一行十五字内外。字面高、約二一・二糎。筆写時期、〔江戸前期〕。印記、第一丁表に「九州大学図書館」「支子文庫」の二種がある。

江戸時代前期には、御伽草子や平安朝物語等多くの作品が、奈良絵本として製作されていたが、本書の料紙や筆跡は、それらの奈良絵本に近似している。本書には、奈良絵は存在していない。しかし、奈良絵頁直前によくみられる散らし書きや、奈良絵が存していたと思われる空白頁があることから、元来は奈良絵が貼付されていたと思われる。しかも、本書の料紙や筆跡から、奈良絵本の中でも最も精緻かつ豪華に作られた、俗に土佐派の奈良絵本と呼ばれるものであったろう。土佐派の奈良絵本は、特大本と大本の大きさのものが普通であるが、本書は、横型の特大本であり、貴重な存在となる。アイルランドのチェスター・ビーティ図書館蔵『聖徳太子伝』が、ややこの形に近いが、それと同様に、本書も相当豪華に製作されていたであろう。

このような奈良絵本は、その奈良絵の美しさからか、挿絵のみを分離して保存されることがしばしばある。本書の場合も、そのようにして奈良絵がとられ、その際に本文の一部や表紙も散佚したものと思われる。現存の状況からみると、冊子本が散佚し、ばらばらになった後、大分順番を間違えて仮綴されたようだ。現存のままでは、前後の筋が通らない。

それでは、本書の概略を、筋が通るように順番を入れ換え、A～Fの章段に分けて記すことにしたい。

A（第九・十丁）

まだらな犬がすさまじい声で吠えるのを聞いて、鶏が身をそばめて隠れている。折節、大鷹がこの犬の声に目を覚まし、犬の様子を見て、犬に、「なぜやかましくするのか。せめて夜は安眠したいのに、声で眠りが覚める。大方の事ならみのがしてくれ」というと、犬が答えていうには、

B（第八丁）

その後、鶏の方へ、青身鶯をもって、すぐ来る旨を言い送る。鶯は、赤坂へ行って、鶏に伝えると、鶏は鶯と共に飛んで来る。面々はこの様子を見て、「珍しいことだ。ふだん来ることがないのに、

C（第三丁）

「別の用でもない。犬の方に使を頼むために呼んだのだ」というと、鶏が何の用かと尋ね、詳しく語る。鶏も、「自分も内々犬に恨むことがあるから心得た」と言って、犬の方へ急いだ。

D（第二・四・五丁）

隼を近付けて廻文を書いて遣わす。隼は各地を回り、松前の鷹に廻文を見せると、物具を固めて馳せ集まる。その勢は雲霞の如くである。それを見て、なにがしは、この山は狭いので洛中で合戦しよう、という。柳丸という鷹は、平地ではかなわないから難所で戦かおう、という。それに対して、うすみどりは、日本国中の勢が集まったのだから三陣に分けて戦かおう、と提案し、皆同意する。大将軍になにがし、副将軍にうすみどり、侍大将に桜丸、戦奉行に柳丸を定めて、六万騎の大軍となる。

E（第六・七丁）

合戦が始まり、互いに駆け合い、切り合う。日没になり、勝負はまた明日に、と約束して引き退く。陣を張り、夜討ちの用心をして、大かがりをたいて待ち明す。

F（第一・十一丁）

鶯は、愛宕山から洛中のかがりを見て、何事だ、と都の方へ飛んで来た。行き会った者に尋ねると、事の始終を語る。鶯は、鷹の元へ行き、対面する。なにがしは、事が急だったため告げられなかったといい、それに対して鶯は、鳥類たる者で、自分に伺いをたてない者はいないといい、早く洛中の陣を引け、と怒る。なにがしは、返答にも及ばず、その夜のうちに、各々の栖へ帰った。

以上のように、本書は、犬と鷹を中心とする合戦があり、それを鶯が中止させた、ことが記されているのである。Aの前と、A・B・C・Dの間、そしてFの後は欠失している。D・E・Fの間は、続けて読むことができるが、あるいは失われた部分があるかもしれない。また、この順番も、前後する箇所があるかもしれないが、原型からさほど遠いものではないであろう。

以上の内容を材料として、本作品の書名や、構成・成立について、考察してみよう。

まず、書名であるが、外題・内題ともにないが、目録題に「大鶯合戦物語」（仮題）とある。この仮題は、『国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録　一九八五年』（一九八六年三月刊）にも踏襲され、

大鶯合戦物語（オオワシカッセンモノガタリ）

として著録されている。確かに、本書第一丁表に「わし」が登場しているが、本書を復原して読む限りでは、鷲は合戦の主人公ではなく、鷹をいさめる存在である。また、第九丁表に「大たか」という表現があるから、それを「大鷲」と混同したのかもしれない。あるいは、単純に、「犬鷲」としたのを「大鷲」と誤写したのかもしれないが、それでも、犬と鷹が合戦しているのではないから、ふさわしくない。もし、これに近い題を付けるならば、前述の内容、さらには、第四丁表に、

今度のいくさ、犬とたかのあんひは、一せんのうちにあり。

といわせていることから考えて、〔犬鷹合戦物語〕とするのが適当であろう。「大鷲合戦物語」という題は、現代のある時点に付されたものであろうが、室町物語の場合、書名が混乱されることがしばしば起るのである。

本書の構成は、内容の概略を記したように断片的にしか知り得ないが、全体的には、犬と鷹のやりとりから不和になり、鷹が一族を集め、犬との合戦に到り、それを鷲が中止させる、というものである。残存していないが、散佚した部分には、犬側とのやり取りや、犬側の状況が記され、結末も長く付されていたろう。

この内容から、本書が御伽草子のうち、『精進魚類物語』や『鴉鷺合戦物語』等の異類合戦譚の流れに属することは明らかであろう。ただし、それらの二作品が、二条良基や一条兼良の製作とされるように、御伽草子の中でも漢文脈の雄渾な文体であるのに対して、本作品は和文脈の勝った文体である。和文脈が勝っている点では、やはり異類合戦譚の一作品である『十二類絵巻』に近い面があり、内容や表現にも近似点を見出すことができる。

『十二類絵巻』は、十二支の動物の歌合から、狸を中心とする獣類と十二支との合戦を描いた作品で、永享十（一四三八）年には成立していた。後崇光院が関係した絵巻が伝存し、絵入本が伝存しない『精進魚類物語』や『鴉鷺合戦物語』とは、好対称をなしている。〔犬鷹合戦物語〕は、江戸時代前期ではあるものの、やはり絵入本であった点で『十二類絵巻』と同様に伝えられたことになる。全体の構成も、『十二類絵巻』の場合は、より複雑ではあるが、異類が二つに分れて、評定し、合戦に及ぶという大筋は等しい。さらに、文体や表現をみても、例えば、『十二類絵巻』において、狸側が評定している箇所に、

分内ひろき所こそ、敵のよはめをみては、かけ出て追ちらし、かたき手こわき時は、引入て、いきをやすめなとして、始終利を得事なるに、分内せはき、つか穴は、かけひきの進退も、心にまかせぬ故に、おほくの勇士を、損亡しつる事は、しかしなから運命の、しからしむるゆへかと、覚ゆれは、（堂本家蔵本・『室町時代物語大成』七）

とある。これは、〔犬鷹合戦物語〕のうち、Dの戦評定の場面に、「ふんないせはし」や、「羽をやすめ」る戦法が記されているのとよく似ている。もちろん、〔犬鷹合戦物語〕の方は完本ではないから、精確な比較はできないが、このようなことから、『十二類絵巻』に近い作品ではないかと想像がつく。

〔犬鷹合戦物語〕には、D以外にも、戦法が詳しく記され、特徴の一つとなっている。ここでもう一つ具体例を取り上げ、その成立背景を探ってみよう。

Eの場面では、いよいよ合戦が始まり、その様子を次のように描

いている。

やうにかくれは、いんにとち、きよりんにせむれは、くはくよくにつらなり、たかひにしをかへりみす、

最初は、「陽に懸くれば、陰に閉ぢ」で、陰陽について語呂よく述べたものである。むろん、底辺には陰陽五行思想があるが、越後流の『武経要略』を始めとする多くの兵法書が説くように、これは、陣形の攻防を示しているようだ。その中でも、山鹿流『兵法神武雄備集』戦律之巻に、

守る者は其きざし陰にとぢられ、攻むる者は其いきほひ陽にひらく、陰にとづる者は人にかこまれ、陽にひらく者は人をかこむ。(『山鹿兵学全集』二)

と記されているように、「陰にとぢ」「陽にひらく」と表現されている。この場合は、城の攻防を述べたものであるが、兵法を説く上でこのような表現がなされていたことがわかる。しかし、この表現は、『太平記』巻第十四に、

敵一萬餘騎、陰ニ閉テ圍マントスレドモ不レ圍、陽ニ開テ懸ントスレドモ敢テ不レ亂(慶長八年古活字本・『日本古典文学大系』)

とあるように、軍記物語にも使用されており、合戦の攻防において、一般的な表現であったことが想像できる。

次の「魚鱗に攻むれば、鶴翼に連なり」も、やはり兵法上の陣形を示したものである。唐太宗の『帝範』には、魚鱗・鶴翼の二つが並記されており、日本においても、八陣の内の二種として、知られていたようだ。北条流の『兵法雌鑑』を始め多くの兵法書に図示され、『源平盛衰記』等には、その様子が文章で記されている。室町軍記の『河越記』には、

魚鱗に陣をかため鶴翼に旗をなびかす(『群書類従』二十一)

というように、やはり語呂よく対応して表現されている。しかし、前掲の陰陽を含めて、〔犬鷹合戦物語〕の表現に最も近いのは、古活字本『保元物語』である。巻中の「白河殿攻め落す事」には、

敵魚鱗に懸破らんとすれば、御方鶴翼につらなって射しらまかす。御方陽に開きてかこまんとすれ共、敵陰にとぢてかこまれず。黄石公がつたふる所、呉子・孫子が秘する所、互に知ったる道なれば、敵もちらず御方もひかず。(『日本古典文学大系』)

とある。魚鱗・鶴翼、さらに陰陽についても、似た表現をとっている。実は、このような記述は、『保元物語』のうち、半井本や金刀比羅本等の古写本にはみられず、古活字本の独自な部分である。内容からみると、付加され得るものであるから、古活字本系統の伝本が成立した時に書き加えられたのかもしれない。時代は下るが、万治二(一六五九)年刊の浄瑠璃『四天王むしゃ執行』に、

てきの心の取やう、ぎよりんかゝり、くわくよくのひらき、いんようのにんずだて、ぐんきをかんがへしる事ちゑなくては有べからず。(『新群書類従』九)

と、似た表現があることから、このような表現が語り物を中心に流行していて、古活字本『保元物語』は、それを記したものとも推測できる。

〔犬鷹合戦物語〕の場合も、このような流行していた表現を借りたとも考え得るが、この記述の直前に、

うちものゝつはをと、けんけきいなつまをとはするよそほひ、かんはのはせちかふかありさまは、ほうけんのいにしへもかく

やとおほえて、おひたゝし。

とあるように、『保元物語』を意識しているようであるから、直接的には古活字本系の『保元物語』を見て、この表現を作った可能性が高いであろう。さらに推測を加えれば、古活字本系の『保元物語』が一般的になるのは、やはり古活字で印刷されてからであろうから、あるいは、本書の成立は江戸時代になってからかもしれない。とすれば、江戸時代に流行する異類合戦譚の嚆矢的な存在となるであろう。

本書については、他に言うべき点も多くあるが、何分断片的なため、残りの部分、あるいは同系統の完本の出現を待ってから、改めて考えてみたい。

以下に、目録題「大鷲合戦物語」を〔犬鷹合戦物語〕として、その全文を翻刻する。翻刻に際しては、入れ違った順番を正し、A～Fの章段に分けて掲出した。丁数は、仮綴の順番通りに記した。また、改行は底本のままとし、仮綴の状態が復原できるように努めた。挿絵があったと思われる箇所は、〔白丁〕とした。丁数は終りに（　）で示した。漢字・異体字はおおむね現行書体に統一し、私に句読点、並びに「　」を付した。

最後に、本書の閲覧と翻刻掲載の御許可を賜わった九州大学附属図書館に厚く御礼申し上げたい。（翻刻許可番号、九大図相第19号）

なお、本書の調査に当り、文部省科学研究費補助金（奨励研究A）が利用されている。

（いしかわ　とおる）

〔犬鷹合戦物語〕

A

こくらきいはほのかけより、またらなる犬の、すさましきこゑして、ほえ出たり。「いかさま、これは我を見てなくやらん。おそろしの事や。いかゝしてふせかん」と、かたかけの、なひきあひたるすゝきの中にわけいり、身をそはめて、かくれゐたれは、かなたこなたを、かろ〳〵ととひまはり、ほえありく。おりふし、又、みねかたなるまつのこすゑに、大たかのすをかけ、ねくらをしめてありしか、此犬のこゑにおとろき、めをさまし、はたゝきをして、あたりを見れとも、まなこにさへきるものもなし。こすゑをさりて、いはのかたにやすらひて、ことのよしをすまし見る所に、かのいぬしきりにほえまはるを見て、　（9オ）

たかの申　（9ウ）

けるは、　（10オ）

〔白丁〕

「いかに犬との、聞たまへ。そのはらは、

いまにはしめぬ事なから、なにを見
つけ、いかなる心にてか、さやうにやかまし
く、人をおとし、かまへのこゑをいたして、
かなたこなたとしたまふそや。われ
らことときのやうなるもの、ひるはいろ
〳〵のおそれあれ、せめてよるはゐ
をやすくせんとするに、とかりたる
声のみゝにいれは、おもひなからも
ねふりをさましはんへるなり。大かた
のよしなき事ならは、きゝのかし見
のかしたまへかし」といへは、犬のきい
ていふやう、「なに、かくのたまふは、たかと

（10ウ）

B

〔白丁〕

そののち、また、には鳥のかたへは、青身（あをみ）
鶯をもつて、「申たんすへきしさい有。
はんしをすてゝ、来りたまへ」といひ
おくる。うくひす、赤坂にゆきむかつて、
つかひのむねをのふる。くたかけきゝ
て、「いかなる事やらん」とおもひ、とるも
のもとりあへす、うくひすとうちつれ
て、とひきたる。をの〳〵、このよしを見
るよりも、「めつらしのあかさかとのや。
御身は、ふたん、さとにましませは、か

（8オ）

やうのさんくはいの折ふしもいかゝあ
るなと、ことはにいたすはかりにて、
しやうし申事もなし。しかるに、たゝ

（8ウ）

C

〔白丁〕

〳〵としたるくち、さしのへて、「へち
きにあらす。御身、犬のかたへ、つかひを
たのまんためなり。ひとへにおそれいり
はんへれとも、そのためはかり、いまこ
こに、しやうし申なり」といへは、にはと
り、「それは、なにやうのつかひやらん」ととふ。
そのとき、はしめをはりのことを、くはし
くかたる。には鳥、つく〳〵ときひて、
「われも、ない〳〵、犬にはうらむる事
あれは、こゝろえたり。いかてかそむき
申へき」とて、さんけんのやうをいひあ
はせ、「しこくうつさし」とて、座しきを
たつて、犬のかたへそ、いそきける。

（3オ）

D

よりも、ゆたんしてはあしかるへし」と
て、しそくはやふさをちかつけ、くわい
ふんをかきて、「これをそこ〳〵へなん
もちてまかれ」といひつかはす。はやふさ、

（3ウ）

うけたまはり、御まへをまかりたち、ま
つ、らく中たかゝみね、あふみの国に
わしのみね、とうこくには、さかみの国
にたかゝをか、それよりまつまへにくた
り、かのくわいふんを見せければ、まつ
まへのたかとも、是をきゝて、「にくき
したいかな、はや、うつたて人ゝ」とて、と
るものもとりあへす、ものゝく、ひし〳〵
とかためて、かのところに、はせきたる。
そのせい、うんかのことく、たにみねに
ゐあまつてそみえにける。なにかし、こ
れを見て、「いかにめん〳〵、このやまは
ふんないせはし。かけひきもしゆうな
らす。らく中に出て、ひろ〳〵と
かつせんをせんといふ、もつともしかるへし」
とそ申ける。その中にも、まつまへの
柳丸といふたか、すゝみ出ていふや
う、「おほせにては候へ共、さためて、かた
きも大せいにてあるへし。しからは、
平地のかけあひそ、かなひかたし。お
なしくは、てきをなんしよにひきう
けて、かけなやまし、みかたのせいつか
れは、こすゑにのほつて羽をや
すめ、かたきくたひれたらんときは、
もみたて〳〵いくさせは、かつ事を

（2オ）

（2ウ）

一時にゑつへしとおもふはいかに」と
のへけれは、その中に、わしのみねのうす
みとり、すゝみ出て、「それは、かりそめの
かりあつめせいにて、わたくしいくさ
なとには、さやうのはかり事もよか
るへし。これは、すてに日本国のせい
あつまりて、このやまにゐあまつた
り。こまのかけひきも、いかてかなふへき。
今度のいくさ、犬とたかのあんひは、一
せんのうちにあり。一しよにあつまり
ゐて、なにのえきかあるらん。このにん
しゆをみつにわけ、せんちんは、みやこ一
てうたかつかさのへんにいたし、二ちん
のつはものは、三てうとひのこうちに
ひかへさせ、さてあらてのむしやをす
くつて、とりへのゝへんにをき、せん
ちんつかれは、二ちんにゆつり、二ちんつかれ
は、あらてのむしやをいたして、かけたて
〳〵たゝかはゝ、なとかかつ事をえん。
これ、ちんへいしうほつかみちなり」と
申せは、をの〳〵このきにとうす。さ
て、大しやうくんは、ひかしやまのなにかし、
ふくしやうくんは、わしのみねのうすみ
とり、さふらひ大しやうには、たかゝみねの
さくらまる、いくさふきやうには、まつまへ

（4オ）

（4ウ）

柳丸とさため、そのせい、つかう六まんよき。せんちん、すてにらく中にいれは、こちんは、いまたあはたくち、きよ水のへんにさゝへたり。そのよそほひ、みなひゝしくそ

見えたり

ける。

〔白丁〕

（5オ）

（5ウ）

E

〔白丁〕

かくて、かたきみかたかけあはせ、矢二すちいちかふるほとこそあれ、うち物のさやはつし、いれちかつてきりあひける。うちものゝつはをと、けんけきいなつまをとはするよそほひ、かんはのはせちかふかありさまは、ほうけんのいにしへもかくやとおほえて、おひたゝし。両ちんたかひにつかれけれは、二ちんのせいに入かはる。二ちんうけとるあらてのいくさをはしめ、をひなひけかけとをし、やうにかくれは、いんにとち、きよりんにせむれは、くはくよくにつらなり、たかひにしをかへりみす「ひくな」と人にけちせられて、めくきをかきりにきりあひける。日すてにさいしうに入せたまへは、「いさ、けふはせうふをけつしかたし。又、明日こそ」とやくそくして、あひ引にひきしりそき、をのかちん〳〵をはり、夜うちのようしんして、大かかりをたき、たかひにきをつめ、かつちうをたいしてまち

あかす。

〔白丁〕

（6オ）

（6ウ）

（7オ）

（7ウ）

F

かゝる所に、うへみぬわしは、あたこのやまより、らくちうのかゝりを見て、「こはそも何事そや。いかさま、是はひやう火のおこりたりとおほえたり」とて、みやこのかたにとひきたり、ととひにゆきあひ、ことのよしをたつねけれは、はしめおはりの事をかたる。わしきゝて、「あさましや。いかなることをおもひたち、きみをもおそれす、わたくしないくさして、らく中をさうとうさすることの、うたてさよ」とて、たかのかたへかけりゆきて、大しやうにたいめんす。なにかし、ま

（1オ）

かりいてゝ、「是までの御出は、申も中〳〵おそれあり。ない〳〵かくと申あけたく候ひつれとも、事きうにはんへるゆへ、かくとも申さぬなり」とて、はしめおはりのことをかたり、わしきゝて、大のまなこを見ひらき、「そも〳〵鳥るゐたる物、いさゝかなる事をも、われにうかゝはぬものなし。しかるに、なんち、それかしかさうてんの身として、かゝる大きをわたくしにくはたつるてう、かつてもつて心えす。それのみならす、一てんのきみにもおそれす、らく中のさはき、かへす〳〵もいこんなれ。はやく、このちん、ひゐてのくへし。さあらんにをひて、それかしか一もんをもつて、こよひのうちに、なんちをうちほろほすへし」と、いかりける。なにかし、一こんのへんたうにもをよはす、其夜のうちに、たきすてたるかゝり火を

（1ウ）

のこし、おのれ〳〵かすみかへかへる。

（11オ）

（11ウ）

〔白丁〕